

環境負荷とライフスタイル

京都大学環境保全センター 高月 紘

御紹介頂きました京都大学の高月でございます。現在、私が所属しております廃棄物学会でも法人化を目指してがんばっておりますが、なかなかすんなりとはいかず、日本下水文化研究会さんの後に続いて、がんばっていきたいと思っております。後からついてゆくと言えば、実は私、稲場先生とは大学が同期であります、当時、環境問題と申しますと、汚れた空気をどうするかとか、飲み水の汚れをどうするかというような、いわゆる「空気」とか「水」をいかにきれいにしてゆくか、というのが緊急課題でありましたので、そのようななかで私は、あまり成績も良くなかったこともありまして、ごみを研究することになりました。

本日は、下水文化ということでございますので水関係の方が多いかと思いますが、このようなかで、ごみの話と申しますと、少し異文化というような感じが致しますが、かなり共通しているところもあります。最近、水をただ単に浄化しているというわけではなくて、水の使い方という点で上流側（使用者）に注文をつけたり、上流側のライフスタイルを変えていくという視点が大切になってきていると思います。ごみの問題もまさにそうでありまして、今までとはとにかく出てくるごみをいかに適正に処理をするかということに汲々としておりましたが、次第にごみが出てくる元、いわゆる私たちの経済活動なり、ライフスタイルを見直そうという

ことになってまいりまして、経済活動やライフスタイルをどのように変えてゆくかということが、非常に重大なこととなってまいりました。そういう意味で、本日はごみの話ではございませうが、水の文化ということに置き換えて、聴いて頂ければと思います。

私は、大学でごみの研究をしているわけですが、まず、ごみの現場を知らなくては行けないということで、ごみを徹底的に調べるということをここの十七、八年行っております。まず、私たちの家から出てまいりますごみの袋を一つ一つ開けて、何がどれくらい入っているか、逐一調べていくという作業をやっております。そして、そのごみを生ごみと、乾いたごみとに分け、これを容積別に分けてまいります。生ごみの場合、圧倒的に台所からのごみが多く、容積でみてみますと容器包装材が非常に多くみられます。すなわち、物を包んだり入れたりする物が、ごみの中で一番多いことになるわけです。普通ごみと言いますと、廃棄物というように、要らなくなったものというイメージがあります。品物を包んでいるものが、ごみと

してもっとも多いことになります。「容器包装リサイクル法」という法律の背景には、このようなことがございます。

容器包装材の典型的代表といたしまして、缶がございませう。日本においては非常にたくさん飲用缶が生産されております。京都市でつくられた条例に空き缶条例というのがありますが、そのきっかけとなったのも町に散乱している空き缶でありました。この条例制定の際、市民団体と関わりになりました、いっしょにメーカーと喧嘩いたしました。その際に、この飲料缶が日本においてどのくらい生産されているのか調査致しましたところ、今から十年ほど前の調査ですが、日本で年間一〇〇億缶といわれておりました。現在では、年間約四〇〇億缶となっております。

これこそ文化ということになります。日本本人は、一人年間約二五〇缶、同じ先進国の欧州では、フランスにしてもドイツにしましても、ワンオーダー違っております。ちなみに、フランスでは一人で年間一七缶、ドイツでは三三缶などで、欧州全部合わせましても、はるかに日

本の消費量には及ばないくらい、日本という国は缶をたくさん消費している国であります。アメリカという国はもつとすぐく、年間一人三三三缶です。戦後の日本が、テレビ等によつてアメリカナイズされていったわけですが、このことにもその傾向が現れております。そんなわけでこの二つの民族は実は「缶」民族であると言つてもいいのではないかと思ひます。同じ先進国でも、ライフスタイルの違いは、このようなところからも垣間見ることが出来ます。アメリカの場合とはとても広い国ですので、そう簡単に水が得られないということもあるかと思ひますが、日本の場合、きれいな水がたくさんあるはずなのに、何故か、このようなものが非常に発達してきてしまいました。

さて、その飲料缶を得るためには、日本中に仕掛けがあるわけでありませう。いわゆる自動販売機というものですが、これも一つの日本の文化と思ひます。日本中に飲料缶を売る自動販売機は、二五〇万台ほどありまして、なおかつ屋外に置いてあります。いわば野外に冷蔵庫を置いておけると同じなのです。ということは、猛

烈に電気を消費するということでありまして、二五〇万台が動きますと、結果的に百万キロワットの発電所が必要になってくるようになるわけでございます。これは、ちようど原子力発電所一基分の発電能力に該当します。このようなことは日本だけでありまして、十五軒に一台の割合で置いてある計算になります。アメリカという国でも、ほとんど屋外に置くというようなことはございません。これも日本の安全ということもあつてなせる技、とも言えるのではないかと思ひます。しかし、本当にこう言うものが必要か、ということを考えなければならぬと思ひます。

容器包装材ということになりますと、私たちは、毎日のように何かしらのトレイを出しているわけでありませうが、発泡トレイ、透明のトレイとございます。京都で五〇軒の家庭から出てまいります一回分のごみの調査で得られたトレイの枚数から、日本中ではどれだけのものか、試算してみました。すると、年間に約五百億枚から六百億枚くらい生産、消費されているのではないかと予測されることになりました。



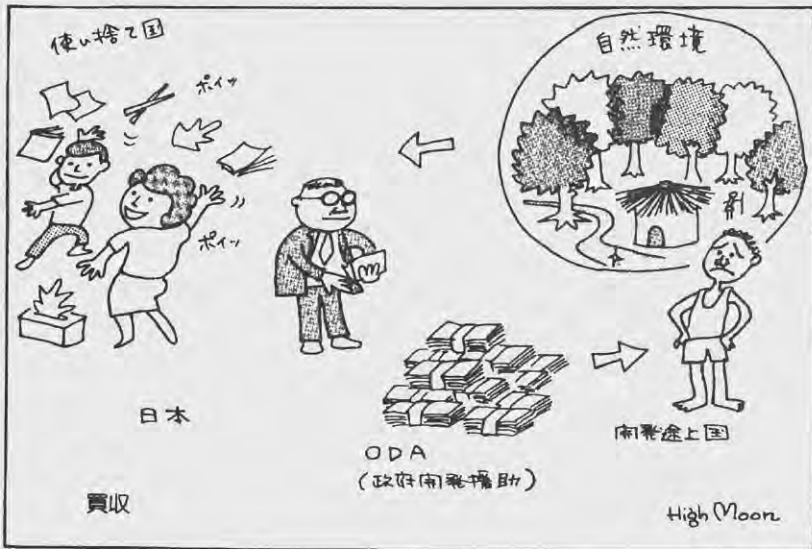
これもまた、一つのライフスタイルでありま
す。例えば、近所のコンビニやスーパーマーケ
ットに行きますと、日本人にとっては当たり前
のバックページなのですが、このことは、日本が
始めたわけではなくて、欧米諸国からきたセル
フサービスということで、現在では日本がこの
ようなことを徹底的にしている、これも日本型
の文化ともいえるのではないかと思います。し
かし、これもたちまちごみになっていくわけ
でございます。

次に、紙ごみですが、これも急速に増えてき
ているものでございます。段ボール紙とかある
いは新聞紙といった紙は、それなりにリサイク
ルの道があるのですが、オフィスから出てまい
ります紙ごみなどは、ほとんどリサイクルされ
ません。毎日大量に捨てられるという、なかな
か厄介なことになっております。さて、その紙
のもととは当たり前ですが、森林でありますので、
結果的には大量に紙ごみを捨てておりますが、
そのもとをただしますと日本の森林ではなくて、
七割から八割は海外の森林ということになるわ
けです。という意味で、日本のごみ問題なので

すが、すぐ世界の森林資源あるいは環境問題につながつている事例であります。

それから、もう一つ台所の文化といえますか、台所のごみを時々詳細に調査しております。下水にもつながるもので、昔の言葉で申しますと厨芥というものです。このようなことは物好きと言ってしまうばそのとおりなのですが、研究室の学生の力を借りて調査してみますと、いろいろなことが見えてまいります。丸一日かかりませんが、学生たちと一緒に、五〇軒のごみ袋を開けて、徹底的に選り分けて、どのくらい調理用のごみや食べ残しがあるか調べてみました。

本日お越しの二年輩の方々にはご記憶があることと思いますが、戦後まったく物のなかつた頃、非常にひもじい思いをした頃には、みかんの皮とかりんごの芯等は徹底的に食べましたし、魚の骨なんかも砕いて食べるようなこともしていたのではなかつたかと思えます。つまり全く調理くずが出なかつたような時もあったわけですね。現在では、これらのものは調理くずとして捨てられております。問題は、いわゆる食べ残しというもので本来ならば、お腹のなかに入る



部分です。台所のごみには、ティーバックとか、たばこの吸い殻等もございますので、このような、ごみを外しますと、約四〇パーセント程度が食べ残しであるということがわかりました。さらに、全く買ってきたままの形で棄てるというものが、十四パーセント程あることもわかりました。最近は大ブル最盛期と比べると、少しは質素になってきておりますが、それでもこれだけの食べ残しがあるということです。とくに驚きますのは、お米が袋に入ったまま棄てられていたり、卵がケースごと、各種の肉類などもトレイごと捨てられていたりすることです。残念ながら、これが現在の日本の現実でございませう。まさに「飽食の国日本」ということでしょうか。

そして、ここでも言えることですが、台所の食べ残しですとか、あるいは全く手を付けていないで棄てられた食べ物というのは、全てが日本で作られているものというわけでありませぬ。ご存じのとおり、今や日本の食糧自給率は、カロリーベースで言いますと四〇パーセント位までになっております。少し古いデータなのです。

が、一九九〇年で四二パーセントですから、現在では、四〇パーセント位まで落ちていっているのではないかと思います。すなわち、六〇パーセントは、海外の食糧を輸入しておりまして、結果的にはたくさん余らせて棄てているということになります。私の計算では、だいたい三二パーセント供給過剰ではないかということでありませう。その供給過剰になっている食料の無駄というものをある食品メーカーの方が計算してみますと一兆円になるということでありませう。この一兆円という額は、日本の農業生産高に匹敵するということでもあります。したがって、そういう意味でいかに膨大な食糧を棄てているか、またその無駄というのはすごいものであることがわかります。そういう意味で日本という国は、日本の資源、あるいはエネルギーを棄てているわけではなくて、海外から大量に取り寄せて、棄てているという性格を備えているわけでありませう。一方では、たくさんさんの世界の難民が食糧を求めているのに、一方では食糧を棄てているということでもあります。このへんも日本の文化度が問われている課題だろうと思えます。

「地球家族」という写真集をご覧になった方もいらつしやるかと思いますが、この写真集は、各国の平均的な家庭にある家財道具を家の外に出してまいりまして、住人とともに撮った写真を集めたものであります。いろんな民族の写真が載っているのですが、アフリカの中央に位置しますマリ共和国の平均的な家族では家財道具は少なく、自転車が目に付くくらいです。イラクの平均的な家族の写真では、敷物が多いかな、などと感じます。テレビも写っています。アメリカの平均的な家族と家財道具の写真では、さすがアメリカで、広大な敷地に車が二台ほどありまして、家財道具も豊富にあります。ブーツという国の平均的な家族と家財道具の写真では、仏教の信仰が非常に盛んな農業主体の国です。ので、緞等が見られ、背景に広大な自然が見えます。

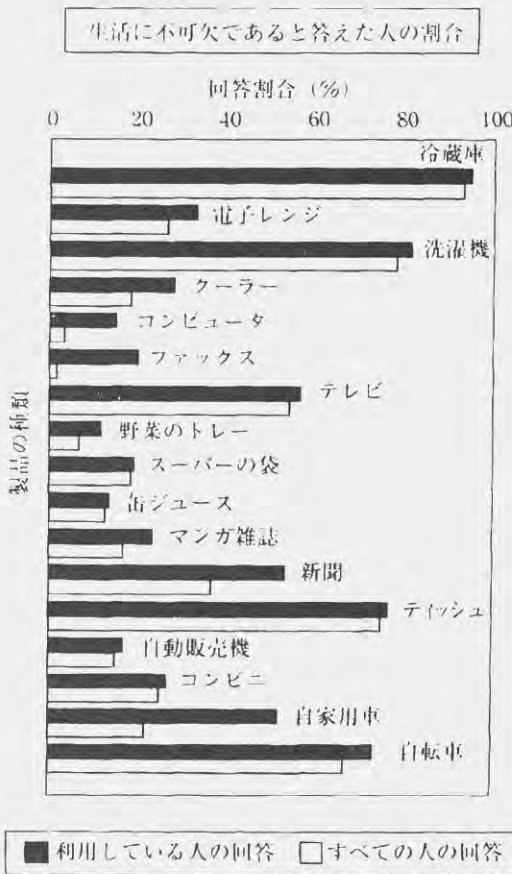
日本の平均的な家族と家財道具の写真では、小さい家の中にたくさんの家財道具がつまっている様子がわかります。家財道具が多いので、家族は真中に小さくしか見えません。うさぎ小屋などと酷評される日本の住宅事情ですが、本

当にこれだけの家財道具を詰めて生活するのが文化的か、豊かなのか、やはり問われる必要があるのではないかと思います。

そういうことで、物をたくさん集めることが本当に豊かなのかということをお話してみたいと思います。我々の身の回りにありますいろんな品物が、どれくらい必要かということ、いろんな年代の方にお願ひした平均的な数値であります。例えば、九八パーセント位は、冷蔵庫がなければ生活ができないということで、絶対に必要なものにランクされます。それから洗濯機も生活に不可欠という人の割合は八〇パーセントぐらいに減りますが、同じく絶対に必要なものにランクされると思いますが、テレビになりますと、五〇から六〇パーセントの方々が、テレビ無しには生活ができないと言っております。つまり、四〇パーセントの方は、別になくても生活はできるという意思表示をしていることになります。このように物によりまして、本当に今の生活に必要なものと、なくても生活はできるというものという幅があるわけで

す。例えば先程も出てまいりました缶ジュースとか、あるいは漫画等の雑誌とかは別に無くても生活はできるという声があるわけでありましたがいまして、本当に必要なものと、あつた方が望ましいのですが無くてもいいもの、必要が無いものと、いろいろなランクに別れますが、これをもとにいたしましてライフスタイルと環境への負荷の関係を計算してみました。

ご存じの方もおいでかと思いますが、「ライフサイクルアセスメント」と申しまして、その製品を作るときに必要な原材料を採るときから、製造、そして使用、廃棄というこの全ての段階の環境負荷を計算していく手法を用いまして、廃棄物量あるいは資源量、そして炭酸ガスの排



出量を環境への負荷として計算いたしました。こうして計算してみた結論だけを申し上げますが、現状のままを100パーセントといたしますと、物の豊かさを少し我慢した場合、あつたほうが良いという品物を半分減らした場合、どのくらい環境負荷が減るかと申しますと、七五パーセント程度になります。一方、本当に必要なものだけで生活をいたしますと、約五〇パーセン

ト程度でおさまるといことがわかりました。すなわち、現在の約半分の物が本当に必要なもので、残りの半分は無くても良いという品物を使っている、その分資源や、エネルギーを無駄にしているということになるわけです。

そこで、物をたくさん持っているのが豊かなのか、あるいは時間が十分ある方が豊かなのか、というところがこれから問われてゆくところなのですが、今までは、どうも日本人はひたすら物を追いかけてきたわけです。物があることが、豊かさの象徴であったということであり、段々そうではなくて、物はなくても、自分の自由な時間の方がもつと貴重だという価値観も一方ではあるわけであり、この辺がこれから問われてゆくところになるのではないかと思えます。同じ豊かなライフスタイルと言いつても、見方によって大分違うということです。先程申しましたように、本当に必要なものだけで生活しますと、五〇パーセント位のエネルギーとか資源量で済むということです。

ですが、この五〇パーセントというのが、実はもう少し違う意味がありまして、現在の一九

九〇年代から遡りますところの一九六〇年代のエネルギーとか資源の量をみてみますと、一九〇年代のちよūd半分となります。したがって、ご年輩の方々にはご記憶があるかと思いますが、今から三〇年前の生活レベルというのが、今の資源とかエネルギーのちよūd半分で生活していたわけであり、それでは、その頃ひもじくって大変だったか、あるいはもう生活が苦しくて大変だったかと思返してみますと、必ずしもそうではなかったのではないかと思います。今から二〇年前です。それでは、この三〇年間の間に何が増えてきたのかといえますと、車であり、あるいは使い捨ての商品であり、あるいはエアコンであり、どこへ行きましても常に温度が最適に保たれている、どこへ行くのにも車という、そういう生活のスタイルに変ってきた結果が、まさにこの五〇パーセントを増やしことになっているわけです。使い捨ての商品の増加や利便さが、エネルギーや資源の消費量をここまで押しあげてきたわけでございます。

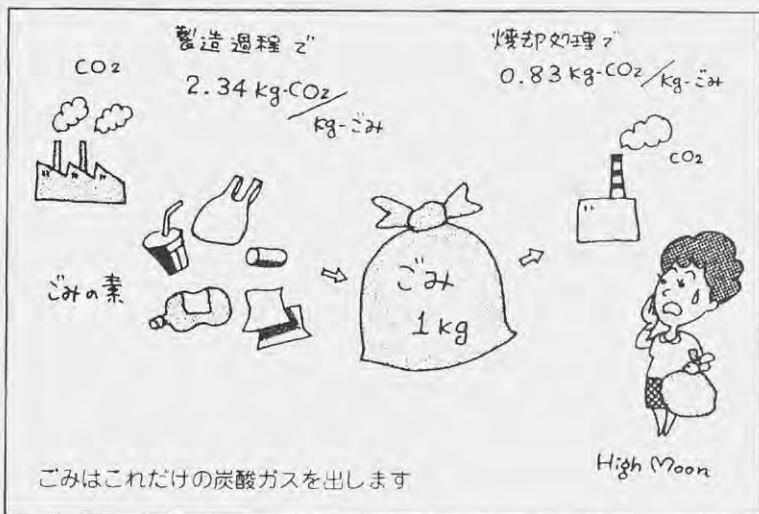
ごみを見て、今までの生活スタイルを見直し

てみますと、本当に必要なものが、ごみになっているのではなくて、半分以上はなくても良かったようなものが、ごみとなっているということに気が付きます。先程、少しお話いたしました、ライフサイクルアセスメントという尺度で、計算してみました。ごみ一キログラムに関係する環境負荷を炭酸ガス換算しておりますが、燃やすときに炭酸ガスは出ますので、これが通常、環境家計簿のようなもののなかで算出されるごみ一キログラムからこれだけ炭酸ガスが出ますという計算根拠になっております。けれども、実は、このごみも元からごみというわけではなくて、いろんな製品からごみになってきたというわけであります。この製品を作るときどのくらいエネルギーを使って、その結果、どのくらいの二酸化炭素が発生しているか、ということも考えてみますと、だいたい燃やしているときの三倍くらいは、実は作るときに出しているということになるわけであります。したがいまして、ごみを一キログラム減らすということは、燃やすときに出る二酸化炭素を減らすだけでなく、さかのぼって考えてみますと、元をたど

って減らしていくことになりますので、ツインの効果があることになります。要するに、シンブルライフが必要だ、あまり消費しないことが必要だ、ということになってまいります。

それから、もうひとつ、あまり知られていないデータと致しまして、日本人が今どれくらい資源を使っているかと申しますと、大人、子供合わせて、ひとりが一日当たり四六・二キログラム消費していることになりました。多くは、建設材料なんかですが、それにしまして膨大な量になります。丁度女性の体重に匹敵する量になるわけであります。ですから、だいたいひとりが、自分の体重と同じだけ資源を消費して、生活をしていることが現在の日本人のライフスタイルでございます。ちなみにアメリカ人はもう少し多くて五六・六キログラムでしょうか、そのくらいの量を一日に消費していることになりました。いかに膨大な資源を消費しているかわかりいただけるのではないかと思えます。

しかしながら、いつまでもこのようなことが続けられるわけはありませんので、それでは地



作者注：ごみ1kg減らすと炭酸ガス3.17kg減らすことができます。



球上でどれだけ資源があるのかということを経算してみますと、地球の友・オランダというNGOが算出した結果なのですが、すなわち二〇一〇年には、世界の人口が、七〇億人になるという想定で、七〇億の人が現在使っている資源やエネルギーを平等に分けあつて使つた場合ひとりの人がどのくらい使えるかという量を計算しています。二〇一〇年には、今現在の資源を使つたとしますと、エネルギー（炭酸ガス排出量にて計算）四・三トンという数値になります。私が現在の日本の場合を計算したものと、エネルギーでは九・二トンとなりまして、ほぼ倍近くのエネルギーを現在使つてゐることがわかります。したがって、日本人は半分くらいに減らさなければ世界平均にならない状況であります。それから水をみますと、日本の場合一日三七〇リットルくらいですが、これに対して世界中の人が平等に使うと、一人当り七〇リットルしか使えないこととなります。それから、アルミニウム、木材といったものも単位がばらばらですが、いずれも世界の人全員で分けた場合の算出値の一〇倍くらいの資源量を今の

日本人は使つてゐることになります。

アメリカ人とか日本人だけたくさん資源を使つて、発展途上の国の人々は少ない量しか使えないということは、やはり問題でありまして、みんな同じ人間でありますから、世界中で平等に使うべきだというわけで、この算出値は大きい意味をもつております。現在の日本人のライフスタイルというものは、やはり倍近く資源や、エネルギーを使うことを前提としたものであり、現在の五〇パーセント位に下げないといけないのではないかと思ひます。という意味で、先程から何回も五〇パーセントと言つておりますが、要するに私たち、今の生活の半分のレベルで生活を行つていくことが非常に重要なわけです。そして、このことがわずか三〇年前の生活のレベルであるということでありまして、決して、江戸時代に戻りなさいといつてゐるわけではありません。

そういうことで考えてまいりますと、ごみの世界ですが、単にごみを可燃ごみとそうでないものに分別するだけではなくて、もう少し進んでリサイクルが必要ということになります。リ

サイクルという意識もだいぶ変わってまいりましたが、さらにもう少し進み、できるだけ再使用するというのを考えてみる必要があるのではないでしょうか。水の場合もまさにそのとおりであり、再使用ということが非常に重要なこととなって参ります。さらに進みますと、シンブルライフということで、まったく無駄なものを使わないということが、非常に重要なこととなって参ります。このことは、水の世界でもまったく同じだと思えます。無駄な水はできるだけ使わないようにするということがとても重要なこととなります。

そのようなことを整理しましたのが、コマースナルになってしまいますが、講談社刊ブルーバックスから出ました「エコロジーテスト」という本であります。この本は、文部省の科学研究費を頂きまして、仲間の研究者と分担して編集致したものでございます。一度機会がありましたら読んで頂きたいと思えます。そこで少しこの本の中に書きましたエコロジーテストというを紹介しようと思えます。先程からお話してまいりましたが、今の環境問題といえます

のは、ごみ問題もありますし、皆様方に非常に関係あります水問題もあります。あるいは最近出てまいりましたダイオキシンのいった有機化学物質とか、窒素酸化物等の大気汚染の問題などいろいろあるわけですが、これらがみんな絡んでいて、どれかひとつだけ、ごみ問題ならごみ問題だけとか、水問題は水問題だけを解決してもよくなるわけです。やはり総合的に対策を打つ、あるいは、今緊急な課題といたって優先順位を決めていくようなことが必要になってまいります。そういうことを少し市民レベルで考えてみようというのがエコロジーテストの趣旨であります。

本日は、ごみの話ということで、少しダイオキシンのお話もしておきたいと思えます。ご存じのとおり、ダイオキシンと申しますのは、最近のWHOの見解ですと、コプラナPCBという類似した物質を新たに認定いたしました、これらをダイオキシン類として、一日当たり人間の体重一キログラムあたり四ピコグラムまでを許容量とするという話ができておりますが、日本でも、総理大臣まで引っぱり出し閣僚会議

でダイオキシンのための法律を作って対応しようとしております。この様な問題が起こってまいりました背景には、日本の場合は今までひたすらごみを燃やすということでやってきましたので、このことが若干裏目に出てまいりまして、焼却炉が非常な、悪の元凶のようになってしまいました。しかし、もともとごみ処理と申しますのは、下水もそうですが、衛生的な視点から伝染病を防ぐという観点で、熱によって病原等を防ぐということで盛んにやってきたわけでありました。そして、燃やすことが一番だとして突っ走ってきたので、燃やす過程を十分に見直すことをせずに、何でもかんでも燃やせということになってしまったわけです。下水の場合もおそらく、いろんなものを混ぜてしまつて、あとで大変だという議論があるかと思いますが、同じように、ごみの場合もひたすら病原菌を殺すためにいろんなものを混ぜて燃やしてしまい、よく言われますように化学工場的に、いろんなものを生成してしまつたという問題が出てきたわけです。ダイオキシンという問題が出てきて、いろんなものを燃やす、やっかいなも

のまで燃やしてしまうことが、逆にいろいろ反省を迫られるきっかけになっているのではないのでしょうか。

それから、下水文化研究会のしおりの中にも書いてございます、環境ホルモンの問題につきましては、これから解明していかないといいなと思います。今まではとにかく、いろんなことがはっきり分からなければ手を打たないというような行政のスタイルであつたわけですが、最近では、二酸化炭素の問題とかオゾン層破壊の問題等で、まだ本当にそのことが原因かということが不確かな段階でも、とにかく早く手をうつという、いわゆる未然防止がこれからは非常に重要な視点になってまいります。そういう意味では、環境ホルモンの問題も、まだ、本当にどういった物質がどれくらい影響度があるかということが不確かではあると思いますが、しかし、それが本当に大変だということが後からわかつて、手遅れになるわけですので、まだ不確かな段階であってもできるだけ規制をかける、いわゆる未然防止、予防対策が非常に重要になつてゆくわけです。

そのような観点でみてまいりますと、この環境ホルモンの問題につきましても、特に水の問題につきましても解明が急がれると同時に、対策が急がれます。今まではとにかく人間に影響があると言いますか、主として人間に影響を受けるというものを対象に、各種の法令等で健康項目とか言いましてような項目を設けて、いろいろと規制をかけております。これからは生態系に関する影響、生態と生物の関わりといった、その辺の関係も非常に重要になってくることになりそうです。このような観点から見直して、環境ホルモンといった問題などは、たくさんの化学物質が人間に影響が及ぶ以前に、いわゆる生態系、とくに小さな生物等に影響がでるところをやはり重要視していかなければなりません。われわれ消費者側から、いろいろなものをただ便利だからというだけで使っていくことではなくて、これからは環境に対してどういう影響があるかということを考えながら、あるいはチェックしながら選択してゆくことが必要になります。

石原東京都知事ではありませんが、「ノー」と

言える消費者にならないといけないわけでありです。今までとにかくコマーシャルに踊らされて、どんどん買ってしまったが、便利さゆえにどのようなことが起こるか、ということを知っておく必要がありますし、そのような視点で次世代につないでゆくことが大切になってまいります。

しかし、情報を提供していくことが、皆様方を含めて環境NGOの大きな役割になってきます。専門家と一般市民の間のインタプレターとしてNGOの役割が求められます。ごみ問題でも、水問題でもそうなのですが、詳しく調べてまいりますと、いろいろな知識が必要になってまいります。しかし、それを難しいからといって、いわゆる一般市民の方たちと情報がうまく交換できないと本当の意味での環境対策は進まないことになります。いかに市民に伝えてゆかということが大切になってきています。そういう意味で、ごみ問題の方では、グリーンコンシューマー（できるだけ環境に対応した商品を選ぶ消費者）が欧米では非常に盛んになっています。本当は、日本の場合もすぐさまこれに對



「NO」と言える消費者

High Moon

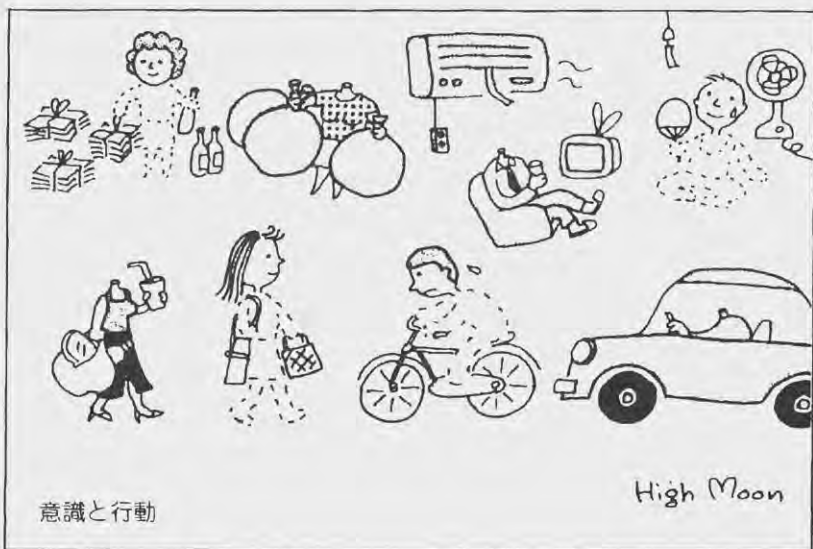
応じていけばいいのですが、なかなか日本人というの、安いものが多いものだという考えがしみつておりますので、少々高くても環境に配慮したものを買いましょうということを言いますが、ましても全然進みません。この辺が悲しいかな今の日本の現状であります。これからは少々高くても環境に配慮したものを選ぶような消費者をいかに作っていくかが課題になっていくかと思えます。兵庫県で環境に配慮した買物袋を配布するといったような日本版グリーンコンシューマーといったものもございしますが、まだまだといった状態です。

一方で、日本の場合ISOの絡みで環境監査あるいは環境マネジメントといったものを盛んに取得するようになってまいりました。また、自治体におきましてもISOを取得しようというところががんばっている自治体もあり、環境に配慮した企業活動なり、自治体活動なりが大切になってきております。企業としては、たまたま今は企業が国際競争を有利にするために自主的にISOを取得しておりますが、自治体とか、大学といったところでの取得といえますと、ま

た違った意味の組織の環境配慮活動を進めようという流れが出てきております。実は、この流れを支えていくのはやはり何と云いましても消費者でありまして、市民が環境に良い商品やあるいは環境にいい行動を取らなければ、せっかく企業なり、自治体や大学等が環境に配慮したプログラムを組みましても、まったく効果が無いことになってしまいます。この様な行動をチェックしたり、行動したりしていくのがISO取得企業の役割になっていくわけでございます。と言いましても、日本の場合の環境意識といいますと、レベル的にはまだまだ不十分です。通産省の行った統計調査で、「環境に関心がありますか」という問いに対して、モニターの九〇パーセントの人たちが、何らかの形で環境に関心がありますと答えております。ところが、ごみのことについてみてみますと、それでは「皆さん方は環境に対してどのくらい配慮していますか」という問いとして、例えば、「デパートとかスーパーで買物をする時に、買物袋を持参して買物をされていますか」という質問については、実際にやっているという人は、途端に十バ

ーセント程度になってしまいます。九割の方々も環境に関心があるにもかかわらず、実際に自分で行動しているかといいますと一割程度になってしまっているわけです。是非やりたいという方もおりますが、実際はほとんどやっていないということですから、環境問題に関心のある方は多いにもかかわらず、実際に行動に移しているのはほんのわずかだということです。それを埋めていくのに、いわゆる環境教育ということが、今後非常に重要なことになるわけです。頭ではリサイクルしなければいけない、例えばクーラーを使わずに扇風機で我慢しましょうとか、車を使わずに電車で行きましょうとか、頭では思っているのですが、身体は全く逆の方向に向かっただけです。頭の中と行動が全く反対である。これを絵で描きますとこのようになるのではないかと思います。

そんなことで私は、ごみをテーマに研究しておりますので、ごみ問題をいろいろ調べることでよっているんなことを伝えて行こう、これから環境教育を行なっていきたいと思っております。各地区から小・中・高校の先生方が集まり、



環境教育のあり方について議論する環境教育学会をつくっております。今後、皆様方のお力をいただきがんばっていきたいと思います。

ごみというものは、もともとは、全て自然界でリサイクルするものであつて、自然界にあるもので、廃棄物というものはなかったわけでありませう。人間というものが廃棄物というものの概念を作つて、いろんなやっかいなものを作つてきたわけでございます。そのような意味で考えてゆきますと、我々のライフスタイルというのが結果的には環境問題に非常に深いつながりがあるわけでございます。今までの便利さ、快適さが、これだけを求めてまいりますと違つた文化になつてしまうわけでありませう。

そのような意味で皆さん方は、下水、私はごみ問題ということですが、これまでどちらも、現在の都市構造のなかで、汚いものは見えないところへ排除しようという思想でずつときたわけでございます。できるだけ私たちの目の前から、生活の意識から離れたところで対応していく、それがいわゆる都市におけるサービスであり、快適な生活になつていたわけでありませう。そう

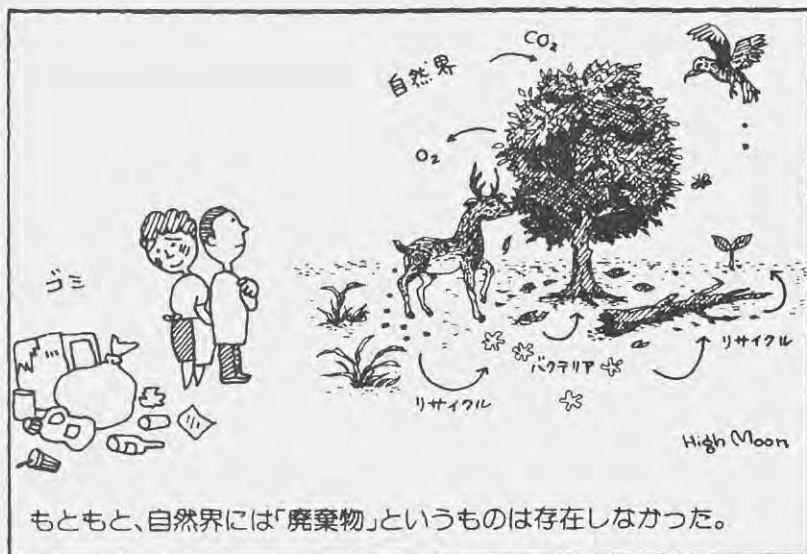
ではなくて、自分たちの問題としてとらえていかなければいけない、ということが次第にわかってきたわけでありませう。

ごみの問題ですと、我々が毎日出すごみを出るだけリサイクルする等の作業を行ったり、さらにいえば、使うことをやめたりする。水についてもまさにそのとおりで、できるだけ無駄な水を使わないとか、水にできるだけ厄介なものを入れないといった努力が、やはり自分たちの水、あるいは資源という意識が無いと進みませんので、液体と固体という違いはありますが、結構似た体系であります。そういう意味では、下水やごみとかたちの資源に常に接して、もののもっている意味と理解するような教育を行っていくことが、これからの本当の意味の豊かな生活につながるのだらうと思ひます。

何度も言いますが、そのような文化を作っていくのは、何も上からやりなさいと言われてきていくものではなくて、やはり自分たちが中心になって、コミュニティのなかで作られ、広げていく文化であるのだらうと思ひます。

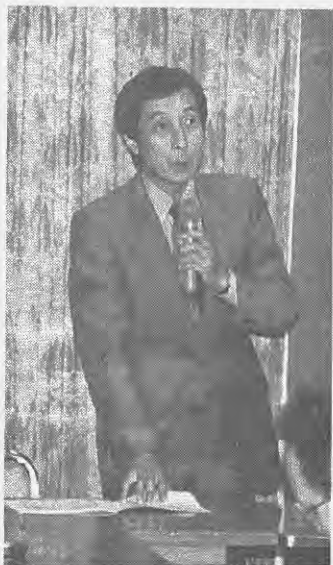
今までは利便性、快適性というのが全てを支配してきたわけで、これが全ての行動を規定していました。やはり、一度、今の暮らしを自分の目で見て、考えてゆくことが大切な時代だらうと思ひます。水についても、本当は自然の循環のなかにあつたものが、ある日蛇口をひねれば出てくるようになることで、どんどん自然から隔離されていくことになりかねません。今我々がどんどん捨てていっている環境というのは、何も我々だけの環境ではなくて、世界のものであつて、環境をないがしろにするということは、むしろ未来の子供たちや孫の財産を食いつぶしていることになるわけです。我々が、次の世代に資源をうまく残せるようなシステムを作っていく必要があるのではないかと思ひっております。

最後に、日本人というのは明治の文明開化以来、ひたすら便利さとか快適さを追い求め、本当の意味の日本人のもつていた自然と調和しながら社会を作っていくというライフスタイルをいつの間にか忘れてしまったのではないでしようか。もともと、自然に対して無頓着な国民で



もともと、自然界には「廃棄物」というものは存在しなかった。

作者註：逆に言えば、「廃棄物」とは人間が生み出した概念なのである。



はなかったはずですから、江戸時代に戻れとは言いませんが、今一度自然と調和した生活を再評価していくことが、本当の意味での成熟した環境社会の形成、環境問題をきちんとかなして環境を育てていくことができる国民の意識形成につながると思います。まさに文化性が問われる、文化性を問うということなのだろうと思います。お金がたくさんあっても、環境に負担をかける生活あるいは生活の質が落ちていような生活は、文化度が非常に低いということになります。今一度、そういう意味での見直しが必要ではないかと思えます。